

10号発刊記念寄稿論文

言語計画から言語管理へ——J.V.ネウストプニーの継承

イジー・ネクヴァピル

「海外主要都市における日本語人の言語行動」共同研究プロジェクト

木村護郎クリストフ監訳

キーワード：言語管理、言語計画、マクロ計画、ミクロ計画、相互行為

要 旨

J.V.ネウストプニーらによって提唱された「言語管理」のアプローチを継承・発展することをめざすこの論文の目的は、(1)「言語計画」から「言語管理」へという用語上の移行を提示すること、(2)「言語管理理論」と呼ばれる言語管理に関する特定の理論の影響力が増していることがこの移行を促進している、という点を指摘すること、(3)この理論の中心的な特徴を説明し、この理論が言語のマクロ計画の分析だけでなく言語のミクロ計画にも適していると主張することである¹。

1. 言語計画の原点と起源

言語と言語行動の意図的な規制は、はるか昔から行われていることであり、言語問題とその解決法は近世前期から (Neustupný 2006, Nekvapil 2011)、あるいはそれ以前からかなり注目されていた。1920年代には、ソビエト連邦で何十もの言語の顕著な近代化が行われた (Alpatov 2000)。しかしながら、「言語計画」の課題が浮上してきたのは、植民地制度の衰退と発展途上国の近代化の過程との関連において、すなわち1960年代に入ってからのものであった。1960年代およびその直後の時期に、(E.ハウゲン (Haugen) が導入した)「言語計画」という用語自体が確立されただけでなく、言語計画理論と呼ばれる具体的な、かつ影響力のある理論が確立された (特に Rubin/Jernudd 1971, Rubin/Jernudd/Das Gupta/Fishman/Ferguson 1977 を参

照)。その枠組みの中で、言語計画は、効率的な技法を駆使する技術的な専門家による、基本的にイデオロギーとは無関係の客観的な過程として理解されていたが、言語外の諸要素との関係、ひいては他の社会科学分野（特に政治学・経済学）との関係が強調された。言語計画は一種の社会的資源計画と見なされ、言語計画理論はこの資源の最適利用を目指すものであった。言語計画理論は、当時の社会計画、特に経済計画を堅固な基盤としていた。したがって言語計画は、合理的な問題解決法として、また具体的な社会的・経済的・政治的背景の中で各種の選択肢の長所と短所を比較評価するものとして概念化されていた。計画された目標は、社会「全体」の目標であり、したがって常に政府当局の承認が必要であった。言語計画の特徴として、それは国家レベルで実行するものとされていた。言語計画専門家の国際的な集まりの一員が、1960年代におけるその集団内の政治的な雰囲気について次のように述べている。「(前略)われわれは政治の過程と中央国家権力の現実を認め、受け入れた。そして国家の行動がもたらす利益を信じ、政府というものが効率的に、満足をもたらす行動を取ることができる」と信じた」(Jernudd 1997 : 132)。言語計画理論は、一貫性のある全体的なものであり、プラス面からだけでなくマイナス面からも定義することができた。すなわち、その理論に欠けている諸要因を挙げることによって定義することができ、それらの要因が後に学問的な関心の対象となった。論文集『言語は計画しうるか (Can Language Be Planned?)』(Rubin/Jernudd 1971) が出版されてから 20 年以上後に、その主な著者の一人が同著について以下のように書いている。

「この本が今日書かれていたなら、『発展途上国のための社会言語学の理論と実践 (Sociolinguistic Theory and Practice for Developing Nations)』という副題を付けることはできず、異なる規模のレベルの (国家から企業まで) 幅広い社会言語学的状況、幅広い各種の利益集団・人口集団 (女性から難民まで)、幅広い各種の伝達状況 (媒体、ルート、情報処理)、そして何よりも異なるイデオロギータク状況ならびに現実のグローバルおよびローカルな社会政治的状況を考慮しなければならなかつただろう。現代の優勢な経済イデオロギーは、規制緩和を支持し (逆説的であるが、これは国家制度または国際通貨基金や世界銀行のような超国家的組織の監督下で施行される)、時代の精神は集团的 (公共の) 利益より個人および小集団の権利や問題に注意を向けることを求め、苦闘する地域社会はおおむね見捨てられて自らの運命に任される。」(Jernudd 1997 : 135, 136)

1960年代および70年代の言語計画の基盤となった考え方（それはその時代に広く見られたものであり、多くの面で明らかに限界のあるものであり、その理論がどのように形成されるかを決定するものであった）からして、当時の言語計画は特殊な、原則として範囲が限定されたものだったようである。したがって「言語計画」という用語はその時代の理論と活動についてのみ使われるべきだと思われる。こうしたアプローチは他に例がないわけではないが、今日では決して優勢な考え方ではない。そうなると、言語と言語行動の意図的な規制を進める際に別の表題が用いられるとしても不思議ではない。

2. 用語上・概念上の諸課題

言語と言語行動の意図的規制に関する有力な英語の出版物は、1960年代の言語計画の基盤からはかなり大きく離れ、はるかに広範な言語的・社会的な諸問題に取り組むようになってきている（特に Kaplan/Baldauf 1997）という事実にもかかわらず、一貫して「言語計画」という用語を使っている（特に Cooper 1989, Kaplan/Baldauf 1997）。また R. B. カプランと R. B. バルダウフは、膨大な編集活動においてもこの用語の使用を促進しているという点を指摘しておかなければならない（この両者が2000年から発行している「言語計画の現行諸課題（Current Issues in Language Planning）」、また1999年から発行している「Language Planning in…（…における言語計画）」のシリーズを参照）。

その中で例外として際立っているのがスポルスキーの著書（Spolsky 2004, 2009）である。彼は、「計画」という言葉をまったく使っていないわけではないが、その使い方が比較的少ない。言語政策に関する理論を構築していく中で、スポルスキーはその3つの構成要素として、(1) 言語実践、(2) 言語に関する信念またはイデオロギー、そして(3)「言語に対する何らかの形の介入、計画、または管理（management）によって、そうした実践に修正を加えたり影響を及ぼしたりしようとする何らかの具体的な努力」を挙げている（Spolsky 2004: 5）。その数ページ後、スポルスキーの用語の使い方が、次のようにさらに明確に説明されている。「言語状況を操作しようとする直接的な努力が行われるケースもある。個人または団体がそうした介入を行うことを、私は言語管理と呼んでいる（私は、計画、設計、あるいは処理という言葉より、管理という言葉を選ぶ）」（Spolsky 2004: 8）。したがって、スポルスキーは徐々に「言語計画」という用語を使わずに「言語管理」という用語を使うようになっていく。

かし、多くの場合、これは単に用語上の慣例の移行にすぎない。

もちろん、「言語管理」という用語を使ったのは Spolsky (2004, 2009) が初めてではない。クーパー (Cooper 1989: 29) が、いくつかの用語の候補のひとつとして挙げているほか、Kaplan/Baldauf (1997: 27, 207-209) がさらに詳しく取り上げ、フランス語の「aménagement linguistique」に相当するものとしている。また、Nelde (2003) が EU の言語政策の課題を取り上げる際に、このフランス語の表現をヨーロッパにおける各種表現の中で最も現代的なものを見なしていることを、ここで指摘しておいてもよいかもしれない。

「言語管理」という用語は、イェルヌドとネウストプニーがカナダのケベックでの学会で行った発表で、社会言語学の文献に明確な意図をもって (programmatically) 取り入れられた (Jernudd/Neustupný 1987)²。イェルヌドとネウストプニーは、上述の戦略を採用している。すなわち、「言語計画」を言語と言語行動の意図的規制の特定の時期に関連付け、より広範な研究分野には新たなこの「言語管理」という名称を導入しているのである。さらに彼らは、カナダの社会言語学における同様の展開を指摘し、次のように述べている。「この『言語管理』という用語を、現在広く使われている『言語計画』という用語に代えて使用することによって、後者を、1970年代に発生した「言語問題の言語学」という特定の時期を指すために使うことができるようになる。この用法は、カナダ・フランス語の「aménagement linguistique」の用法と一致するものである (後略)」(Jernudd/Neustupný 1987: 71)。

したがって、言語計画理論は、[つづりや語彙、言葉づかいなど限定的な問題を扱った]プラハ言語学派の言語修整理論 (Language Cultivation Theory) と同じく、言語管理の社会制度の例を示すにすぎないということになる。このような用語上の戦略に従い、「言語管理における言語計画の段階」という表現を使うことができるかもしれない (Neustupný 2012)、研究分野全体が、より歴史的な文脈へと移行する可能性がある (Neustupný 2006 を参照)。

これまでのところ、スポルスキーと、ネウストプニーおよびイェルヌドとの間の相違は、後者の方が用語の使用に、より慎重であるというだけのように見えるかもしれない。しかし、それは正しい見方ではない。スポルスキーの著書では、「言語管理」という用語が、すでに産み出されている言説をなぞった以上のものとは考えにくいのに対し、イェルヌドとネウストプニーは、新しい具体的な理論を展開しているのである。

これについて次項に述べる³。

3. 言語管理理論

ここで言う「言語管理理論 (Language Management Theory)」とは、主としてネウストプニーおよびイェルヌドによって、またその後その他の人々によって構築された理論を指す。基本的な誤解を避けるために、この理論の固有性は「言語管理」という表題ではなく、その理論的主張にあるという自明の事実を強調しておくべきであろう。ここでそのことを述べる理由は2つある。ひとつは、この理論の基本的な特徴のいくつかは、異なる名称、特に「言語訂正の理論」という名称（この考え方については Cooper 1989:40f. を参照）の下で発表されていること、もうひとつは、著者によっては「言語管理」という用語を、ネウストプニーとイェルヌドらの理論上の命題を含まずに使っていることである。こうした著者は「言語管理」を「言語計画」とほぼ同義に使っているが、これは Spolsky (2004) のアプローチでもある⁴。

言語管理理論は、言語計画理論と並行して発生したものであるが（特に、論文集 Rubin/Jernudd 1971 および Rubin/Jernudd/Das Gupta/Fishman/Ferguson 1977 におけるイェルヌドによるネウストプニーへの言及を参照。また Jernudd 1983 を参照）、その後徐々に言語計画理論からは大きく離れてきており、明確に異なる代替理論となっている（Jernudd 1990 を参照）。その決定的要因となったと思われるのは、ネウストプニーがマクロ言語計画を、言語問題の理論にしっかりと根差したものにしようとしたことである（特に Neustupný 1978 を参照）。理論的なレベルでは、特定の相互行為（談話）が言語問題の主な発生源として認識されたことによって、言語計画に関する理論的な思考がミクロの次元へと移行することになった（木村 2005 参照）。言語計画活動の理想的なモデルは、次のようなものであった。個々の相互行為における言語問題の確認 → 特定の言語計画単位による諸措置の採用 → 個々の相互行為におけるこれらの措置の実施。Neustupný (1994: 50) は、これを以下のように説明している。

「言語計画におけるいかなる行動も、談話に現れる言語問題を検討することから始まるべきであり、談話においてそうした問題が除去されるまでは、その計画の過程が完了されたと見なすべきではない、と私は主張する。」

この理論を最も包括的に取り上げているのが、ネウストプニーとネクヴァピルのモノグラフ (Neustupný/Nekvapil 2003)、ネウストプニーの論文 (Neustupný

2002)、およびその旧バージョン (Jernudd (1991) として発表された講演集に収録) である。最近では、Nekvapil (2006) や Nekvapil/Nekula (2006) で理論的な体系化が行われており、また Nekvapil (2009) および Nekvapil/Sherman (2009a, 2009b) Sloboda/Szabó-Gilinger/Vigers/Šimičić (2010)、Mariott/Nekvapil (2012) に、さらに革新的な内容を見ることができる。

3.1. 言語管理とは何か

この理論の基盤は、言語使用の特徴である2つの過程、すなわち (1) 談話の生成と受容と、(2) 談話の生成と受容を目的とする諸活動 (メタ言語活動) とを区別することである。この後者の過程を「言語管理」という。ネウストプニーは、フィッシュマン (J.A.Fishman) の言葉をそのまま使い、言語管理理論は (特定の精神面の現象のほか) 「言語に対する行動 (behaviour toward language)」を対象とするものである、ということをくりかえし述べている。言語管理を説明する状況として、例えば、X という話者が、その対話者である Y が理解することのできなかつた外国語の言葉を慎重に発音して繰り返すこと、または外国語の言葉の発音の標準化を学術機関が実行し、省庁が承認することなどが挙げられる。

3.2. 単純な管理と組織された管理

上記の例が示すように、言語管理は2つのレベルで実行することができる。まず、話者が自らの、または対話者の談話の個々の特徴または側面を「今、ここで」(すなわち特定の相互行為において) 管理することができる。このような管理を「単純な」管理または「談話ベースの」管理という。その例が例1である。ここでは、チェコのテレビの司会者が、代名詞「který (誰)」という標準形ではない形を使った後でそのことに気付き、標準形で「kteří (誰)」と言い直す。すなわち、自らを訂正する。

例1 (Nekvapil 2000a : 174 より)

司会者: témata, o kterých bude dnes řeč, možná poznáte už podle jmen pánů, který kteří přijali dnešní pozvání (今日の討論のトピックは、ご招待を受けてくださったところの (非標準形) ところの (標準形) 方々のお名前を見ただけで皆さんもおわかりかもしれません)

組織された言語管理は、特定のひとつの相互行為に限定されず、指示的で、多かれ

少なかれ体系的なものである。言語管理の組織化にはいくつかのレベルがある。社会的ネットワークが複雑さを増し、それにともなって言語管理の度合いが増している。きわめて複雑なネットワークにおいては、組織された管理が、大勢の参加者（専門家や機関も含む）による公的または準公的な討論の主題となり、参加者の多くがさまざまな理論やイデオロギーを参照している。その例となり得るのが、1989年以降ロシア語教育の義務化を停止し、「西洋」言語の教育を促進しようとしたチェコ政府の決断である。言語計画理論は、高度に組織された管理のみを対象としていたが、当初の社会言語学的状況の分析を強調することによって、単純な管理の存在、特にその評価段階の存在を暗黙のうちに認めていた（Ferguson 1977を参照）。

言語管理理論は、組織された管理ができる限り単純な管理に依拠することを要求する。チェコ共和国では、第1例のようなケース（標準的なチェコ語と日常的なチェコ語の間の形態論的なゆれ）は高い頻度で起きているため、実際に組織された管理の対象となっているが、具体的な言語政策措置にはつなげていない。ロシア語教育の停止は、ロシア語が概して役に立たない上に共産主義体制を象徴する言語であると考えられていたという事実に基づいている（この2つの例について詳しくは、Neustupný/Nekvapil 2003を参照）。

単純な管理も組織された管理も、権力（すなわち特定の利害を押し通す能力）という要因と密接に結び付いている（Jernudd/Neustupný 1987, Nekvapil 2007）。言語管理理論の基盤となる前提は、原則として言語計画のさまざまな状況においては各参加者および社会集団の利害が同一ではなく、そうした参加者間・集団間の権力の分布は一様ではない、ということである。したがって、言語管理理論における個人および集団の言語権とその侵害の問題は、比較的早期に取り上げられていた（Neustupný 1984）。また、言語計画理論と比較して、言語管理理論は「中央権力による強制に対抗する人民の力を学究的にとりあげたもの」と特徴付けられた（Jernudd 1993: 134）。

3.3. 管理ネットワーク

言語管理は、さまざまな範囲の社会的ネットワーク内で行われる。それは各種の国家機関内で、社会全体に及ぶ範囲の諸活動として行われるだけでなく（言語計画理論ではこれが主な焦点だった）、個々の企業、学校、メディア、協会、家族内で、または特定の相互行為における個々の話者の中でも行われる。

言語管理理論がマクロの社会的次元だけでなく、ミクロの社会的次元をも扱うものであることは明らかであろう。後者の次元の概念化にはさまざまな形態がある（第4項を参照）。

3.4. 管理の過程（プロセス）

言語管理にはいくつかの段階がある。談話の生成と受容の安定と確実性は、規範の存在に基づいている。言語管理理論では、談話が規範から外れた瞬間に話者が談話に「留意する」ことを前提としている⁵。そして話者は、その逸脱（ないし留意された言語現象）を肯定的または否定的に「評価する」可能性がある。さらに話者は調整を「計画し」、最終的にその調整を「実施する」かもしれない。この4つの段階（留意、評価、調整計画、実施）が、言語管理の各段階である。これらの段階のすべてを実行する必要はなく、どの段階の後でも管理を終了することができる、という点が重要である。例えば、話者がある現象に留意しても、それを評価することはしないかもしれない。また評価しても調整を計画しない、あるいは調整を計画しても実施は控えるという可能性もある。例1では、調整実施の段階の後に管理過程が終了している。

しかし、この4つの段階は、組織された管理のレベルでも明確に現れ得る。理想的には、留意はさまざまな範囲の言語状況に関する調査または専門家の報告に基づいて行われる。これは実際には特定の現象（例えば、言語Xにおける外国語の言葉の発音、または企業Yにおける現地社員と海外駐在員間のコミュニケーション）の単純な管理を徹底的に調査すべきであるということの意味する。この段階に続いて、これらの状況のさまざまな側面の評価、言語学的・政治的調整の計画と準備、そしてその実施を行うことができる。

組織された言語管理においては、言語問題、すなわち特定の相互行為で個々の話者に留意されるだけでなく、否定的な評価を受けるような、規範からの逸脱を特定することが特に重要であることは確かである。一方、言語管理理論は言語計画理論に従って、当初「言語問題の言語学」として構築されたものであるが、最近では肯定的な評価を受けるような規範からの逸脱（いわゆる「満足（gratification）」）にも注意が向けられるようになっている（Neustupný 2003）。これらも、例えば公立・私立の学校における特定の外国語の選択、あるいは科目としての開講など言語管理の大きな推進力となる可能性がある。

3.5. 言語管理・コミュニケーション管理・社会文化管理

「言語管理」という言葉、そして上述の例の大半によると、言語管理理論は主として狭義の言語現象、すなわち「言語能力」の現象を対象としているように思える。しかし、実際にはそうではない。コミュニケーションの現象（例えば、政党など特定の社会集団のメンバー間で使わなければならない特別な呼称などを参照）、そして社会的文化的現象を管理することも可能である。以下の例は、カナダ・オンタリオ州にある英語圏の大都市のフランス語マイノリティの学校で行われた、民族誌的調査(Heller 2001)からの例である。

例2 (Heller 2001: 225 より)

1. 先生: pourquoi lit-on? (私たちはなぜ読書をするのでしょうか)
2. ミシェル: pour relaxer (リラクセスするためです)
3. 先生: pour se détendre, 'relaxer' c'est anglais (「se détendre (リラクセスする)」ためですよ。「relax」は英語です)

この例の3行目に、言語管理を明らかに見ることができる。教師は、生徒のミシェルがフランス語での談話において英語の単語を使ったことに留意し、これに否定的な評価を下し、調整を実施したのである。教師も生徒もフランス語と英語の単語を認識することができていることから、双方とも該当する言語能力を有しているはずである。しかし同時に、コミュニケーション能力もかかわってくる。2人とも、バイリンガルであるにもかかわらず、授業では一貫してフランス語を使うという規範に従うという認識があった。しかしながら、M. ヘラーが指摘するように、社会文化的な管理もかかわっており、教師は、政治的・経済的に支持されている「良きフランス系オンタリオ人の形成」というイデオロギー的な原則を志向している。

組織された管理に関する限り、Neustupný/Nekvapil (2003) は、言語管理、コミュニケーション管理、および社会文化（社会経済）管理は階層を成していると主張する。言語管理の成功（例えばロマ人にチェコ語を教えること）にはコミュニケーション管理の成功（チェコ人とロマ人に共通の社会的ネットワークの構築）が条件となり、さらにコミュニケーション管理の成功には社会経済管理の成功（チェコ人とロマ人のネットワークの構築につながり得る雇用の提供）が条件となる。

3.6. 方法論

言語管理の分析に使われる方法論に不可欠の要件は、組織された管理のレベルで計画される調整は単純な管理の分析を基盤としなければならない、という原則に基づくものである。したがって、個々の相互行為の分析を可能にするような方法が重視される。言語管理理論は、当初から、エスノメソドロジーによる会話分析（特に訂正シーケンス分析の分野）の手法だけでなく、研究成果をも活用している。理想的には、自然に発生する相互行為の聴覚的および視覚的な特徴の両方を記録すべきであり（Marriott 1991a, Neustupný 1996）、これらの相互行為の詳細な転写を分析すべきである。しかしながら、管理過程のすべての段階を記述しなければならないため（その際、会話分析のように調整実施の段階に限定されることはない）、言語管理の調査の手法は、留意、評価、および調整計画という精神面の現象をも扱うことができる。この点で、最も頻繁に使われているのは、いわゆるフォローアップ・インタビューという手法である。このインタビューで調査者は、録音される相互行為の参加者自身に、当該相互行為内で発生した言語管理の個々の段階を再構築してもらおう。たとえば、参加者が録音された相互行為の特定の部分を聞き、調査者が話者に、録音された相互行為で対話者が使用した特定の語形を評価したかどうか、またどのように評価したかを尋ねる（Neustupný 1999）。

多くの社会的状況において、分析者は実際の相互行為に直接アクセスすることができないため（これは例えば倫理的あるいは職業的な理由による）、言語管理理論は、分析者が少なくともこれらの相互行為に関連性のある方法でアプローチのできる手法に依存する。「相互行為（インターアクション）・インタビュー」と呼ばれるインタビュー（Muraoka 2000, Neustupný 2003, Sherman 2006）では、話者が参加した相互行為の詳細を再現するが、その際、フォローアップ・インタビューとは異なり、自らの記憶のみに頼る（時にはスケジュール帳のような補助的なものを使うこともある）。このほかにも、フォーカス・グループ、体系的（自己）観察（To/Jernudd 2001）、およびその他各種のインタビュー（ナラティブ、半構造的）がある。言うまでもなく、これらの手法に伴って言語管理の行為が要約されること（「管理の要約」）には方法論上の問題が伴い、これに注意を払わなければならない（Nekvapil 2004）。

3.7. 用語

この論文に関連して、言語管理理論の概念装置は、英語だけでなく日本語、チェコ語、ハンガリー語、およびドイツ語でも作成されていることを指摘しておく。

4. 言語計画と言語管理理論におけるマクロとミクロの問題

前述のように、「言語管理における言語計画の段階」は、植民地制度の衰退の後に、発展途上国の言語および社会の問題への対応として発展してきたものである。通常、当時の言語計画を実行したのは、国家、または社会全体を代表する専門家たちや国家が承認した諸機関であった。これまでは、このレベルでの言語および言語行動の意図的規制が最も注目されてきた。一方で、国家機能の弱体化、社会の断片化の進行、そして民主化の前進によって、「言語のミクロ計画」の研究の必要性が高まっている（Kaplan/Baldauf 1997、またヨーロッパに関しては Phillipson 2003, van Els 2006 など）。

当初から、言語管理理論の推進者たちは、この理論がマクロ計画とミクロ計画の両次元に対応し得るように構築されていることを強調してきた。特にこの点を強調しているのが Kuo/Jernudd(1993) で、彼らは、分析者だけでなく国家の言語計画担当者がマクロとミクロの視点をバランスよく採用することを推奨している。Marriott (1991b) も、日本人とオーストラリア人の買い物場面における相互行為の分析、および政府・産業・法人諸機関の発行した観光関連文書の分析に基づいて、同様の結論に達している。以下に述べる内容は、理論レベルで言語計画と言語管理理論における「ミクロ」と「マクロ」の関係を説明しようとするものである。

国家レベルで行われる言語計画は、通常「マクロ計画」と呼ばれる。しかしながら、言語は、より複雑ではない社会制度の影響を受けることも明らかである。「ミクロ計画」という用語が使われるようになったのはそのためである。Kaplan/Baldauf(1997) は、個々の銀行、企業、図書館、学校、商店、病院、裁判所、あるいはサービスといった施設の活動に関連して、この用語を使っている。また、ひとつの都市が、それらのミクロ計画の単位を構成することもある。そうした、より複雑ではない社会制度における計画を研究することによって多くを学べるという点に疑いはない。そして、そのような研究の成果が、マクロ計画とミクロ計画との関係を明らかにできる可能性があるという点が重要である。一方、ここでマクロの言語計画とミクロの言語計画の両方が同じ基盤の上で概念化されているということを看過してはならない。この2つは、単に複雑度の異なる「社会構造」内で機能しているにすぎないのである。「マクロ」と「ミクロ」は、社会的な広がり（「連続体」）の両極端を表すものであり、このスペースはさらに複雑度の異なるいくつかの「マクロ」や「ミクロ」に分化することができる。こうした考え方に従えば、多くの著者がメゾレベルの計画に言及していることも意外なことではない（Kaplan/Baldauf 1997 を参照）。

しかしながら、「マクロ」と「ミクロ」の次元間の関係は、さらに別の方法で概念化することができる。それは社会学ではよく知られている方法であり、社会言語学においても時折見られる方法である。概して、このアプローチは社会構造（「マクロ」）と相互行為（「ミクロ」）の対比と見なすことができる（例えば、Boden/Zimmerman (eds.) 1991 を参照）。こうした概念化における「マクロ」と「ミクロ」の間の関係は、社会学の議論の永遠のテーマである。さまざまな見方があり、それぞれが独自の研究目標を示すものであるが、その中でも次の2つが両極の見方を表していると考えられる。(1) 「マクロ」と「ミクロ」は、社会的現象の2つの個別の領域であり、したがってそれぞれを個別に扱うことが正当である、(2) 「マクロ」と「ミクロ」には基本的な相違はない。なぜなら「ミクロ」も「社会構造」のひとつだからである。この2つの見方は、表明のレベルでも研究の実践のレベルでも、社会言語学の分野においても必ず発生するはずである。事実、(1) の見方は、広く知られている Fasold (1984, 1990) の論文における二分割に反映されている。本質的に、自律的な「ミクロ」はいわゆる相互行為の社会言語学に近い (Nekvapil 2000b)、自律的な「マクロ」は言語計画理論に近い。(2) の見方は、エスノメソドロジーによる会話分析を行う人々の一部が主張するものである。ここでは、本論文にとって特に重要性を持つ3番目の見方に注目したい。(3) の見方は、「マクロ」と「ミクロ」の間の関係は弁証法的 (dialectical) なものである（すなわち社会的現象のこの2つの次元は相互に影響を及ぼし合う）という考え方に基づく。それが意味するのは、第1に、特定の相互行為において参加者は明らかに自らを社会構造に合わせ、それによって社会構造を再現するという、そして第2に、特定の相互行為において参加者はこれらの構造の変換に貢献するということである。このことを Giddens (1993 : 165) は次のように説明している。「構造は、相互行為の創出の条件と結果の両方として存在する。」こうした一般的な事実を特定の社会的あるいは社会言語学的な研究プログラムに置き換えることは難しい。(3) の見方に関する実証的研究は、社会構造が特定の相互行為にどのように反映されているかという問題に集中しているようである。例えば、Heller (2001) は、オンタリオ教育省が発令した規制（遠方の事情）が、特定のフランス語マイノリティーの学校における言語計画文書（近位の事情）にどのような影響を及ぼすか、またそれらの文書の内容が、この学校の教師によって特定の相互行為で実施される訂正の種類にどのように反映されているか（直近の事情）ということを実証している (Mehan 1991 も参照)。補完的な過程として、特定の相互行為で発生する言語問題が地域の機関によって検討され、その結果、省庁レベルで規制が発令されたり、

場合によっては省庁に言語計画組織が設置されたりするということを想定することもできる。

明らかに、言語管理理論は、「マイクロ」と「マクロ」の社会的次元を「完全に統合」できるように構築されており、この2つの次元の関係は、上述の(3)の見解に相当するものである。言語管理理論の枠組みの中で、言語のマイクロ計画は、単純な(談話ベースの)管理に伴うものであり、言語のマクロ計画は、(さまざまな複雑度のネットワークにおける⁶⁾組織された言語管理に伴うものである。上述のように、この2種類の言語管理は、相互に弁証法的に絡み合っており、組織された管理は単純な管理に影響を及ぼすが、一方で組織された管理は単純な管理の結果として生じるものである。

理論から言語実践へと進むと、このような言語計画の状況が最適であろうことがわかる。しかしながら、組織された管理と単純な管理が相互に影響を及ぼし合わない状況も確かに存在する。それは特に、言語管理を行う者が、個々の相互行為における通常の話者の言語問題を過小評価したり、場合によっては意図的に無視したりする状況である。そうした状況は批判に値すると言っても異論はないと思われる。具体的な話者とその談話、そしてそこでの諸問題が不可欠の位置を占めているような枠組みを提供する言語管理理論は、そうした批判の適切な基盤となるものである。

5. 結論——新たな言説の形成?

言語管理理論は、言語管理に関するいくつかの理論のうちの一つである。私はここで、この言語管理理論が、これらの複数の理論の中でも特別な位置を占めること、そして現代の諸課題に対応できる理論であることを実証しようとしてきた。この理論は、その範囲と一般性において、言語管理の他の理論を超えるものとなる可能性が高く、そのため Neustupný (2004) は、この理論を「言語管理の総合理論」と呼んでいる。したがって、言語管理理論は、言語と言語行動の意図的規制に影響を及ぼす「歴史的過程」を調査することができる (Neustupný 2006, Nekvapil 2011 を参照)。

Spolsky の著書 (2004) の例は、「言語管理」という用語が、もはや「原作者」が問題ではなくなる言説の一部となるということを示した。この言説にはさまざまな出典が考えられる。私が本稿で挙げたものとしては、この用語に言及している、言語計画に関する2つの著名な研究 (Cooper 1989, Kaplan/Baldauf 1997) がある。また「言語管理 (language management)」と「aménagement linguistique」の同等性 (Kaplan/Baldauf 1997) についても述べたが、このフランス語の用語には大きな権威がある

(Nelde 2003)。また何年か前にインドのマイソールにあるインド諸語中央研究所が、「International Journal of Language Management」誌の出版を発表したことも興味深い。しかしながら、「言語管理」という用語の使用は言語管理理論自体の影響力によって促進されているということが、根本的に重要なことであると思われる。このことは Spolsky (2009) も認めているところである。

言説に関する理論（特にフォーコーの流れを汲むもの）から得られた知見に基づき、われわれは今、新たな話法だけでなく、ひとつの研究分野全体の再編を目の当たりにしていると考えられる⁷。

注

- 1 本稿は、*Sociolinguistica* 20, 2006, pp.92-104 (Tübingen: Niemeyer) に掲載された論考を若干修正・改訂したものである。本稿はカレル大学研究発展プログラム 10 言語学の下位プログラム「言語状況における言語管理」の助成を受けている。
- 2 Cooper (1989) および Kaplan/Baldauf (1997) が「言語管理」という用語を使っているのは、イェルヌドとネウストプニーに言及するときであることを指摘しておく必要がある。
- 3 この項およびそれ以降の各項は Nekvapil/Nekula (2006) による。
- 4 しかしながら、Spolsky (2009) はネウストプニーとイェルヌドの流れを汲む言語管理理論をある程度受け入れている。
- 5 これが、留意のもっとも典型的なケースであったとしても、言語管理理論の最新の展開によると、管理過程は規範からの「逸脱」によって引き起こされるとは限らない。[訳注:言語管理理論に関する導入サイトの「管理過程」に関する記述参照。
<http://languagemanagement.ff.cuni.cz/en/process>]
- 6 これまでは、「マクロ」と「ミクロ」の関係は、通常、組織された言語管理の異なるレベル間の関係にすぎないと考えられていた。
- 7 この論文執筆の各段階で、Tamah Sherman、Marián Sloboda 両氏に有意義なコメントをいただいたことにお礼を申し上げる。

文献

- Alpatov, V.M. (2000) : *150 языков и политика 1917-2000. Социолнгвистические проблемы СССР и постсоветского пространства* [150 languages and policy 1917-2000. Sociolinguistic problems in the Soviet Union and the Post-Soviet area]. Moskva : Kraft + IV RAN.
- Boden, D./Zimmerman, D.H. (eds) (1991) : *Talk and Social Structure*. Cambridge : Polity Press.
- Cooper, R.L. (1989) : *Language Planning and Social Change*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Dovalil, V. (2011) : Review of Spolsky (2009) : *Sociolinguistica* 25, 150-155.
- Fasold, R. (1984) : *The Sociolinguistics of Society*. Oxford, Cambridge : Blackwell.
- Fasold, R. (1990) : *Sociolinguistics of Language*. Oxford, Cambridge : Blackwell.
- Ferguson, C.A. (1977) : Sociolinguistic settings of language planning. In J. Rubin, /B.H. Jernudd/J. Das Gupta/J.A. Fishman/C.A. Ferguson (eds), *Language Planning Processes*. The Hague/Paris/New York : Mouton Publishers, 9-29.
- Giddens, A. (1993) : *New Rules of Sociological Method*. Second Edition. Cambridge : Polity Press.
- Heller, M. (2001) : Undoing the macro/micro dichotomy : ideology and categorization in a linguistic minority school. In N. Coupland/S. Sarangi, Ch.N./Candlin (eds), *Sociolinguistics and Social Theory*. Harlow : Longman, 212-234.
- Jernudd, B.H. (1983) : Evaluation of language planning – what has the last decade accomplished? In J. Cobarrubias/J.A. Fishman (eds), *Progress in Language Planning: International Perspectives*. Berlin : Mouton, 345-378.
- Jernudd, B.H. (1990) : Two approaches to language planning. In V. Bickley (ed.), *Language Use, Language Teaching and the Curriculum*. Hong Kong : Institute of Language in Education, Education Department, 48-53.
- Jernudd, B.H. (1991) : *Lectures on Language Problems*. Delhi : Bahri Publications.
- Jernudd, B.H. (1993) : Language planning from a management perspective : An interpretation of findings. In E.H. Jahr (ed.), *Language conflict and language planning*. Berlin : Mouton de Gruyter, 133-142.
- Jernudd, B.H. (1997) : The [r] evolution of sociolinguistics. In Paulston, Ch.B./Tucker, R. G. (eds), *The Early Days of Sociolinguistics*. Dallas : Summer Institute of

- Linguistics, 131-138.
- Jernudd, B.H./Neustupný, J.V. (1987) : Language planning : for whom? In L. Laforge (ed.), *Proceedings of the International Colloquium on Language Planning*. Québec : Les Press de L'Université Laval, 69-84.
- Kaplan, R. B./Baldauf, R. B., Jr (1997) : *Language Planning from Practice to Theory*. Clevedon : Multilingual Matters.
- 木村護郎クリストフ (2005) 「言語政策研究の言語観を問う : 言語計画／言語態度の二分法から言語管理の理論へ」『言語政策』1, 1-13.
- Kuo, E.C.Y./Jernudd, B.H. (1993) : Balancing macro- and micro-sociolinguistic perspectives in language management : the case of Singapore. *Language Problems and Language Planning* 17, 1-21.
- Marriott, H. (1991a) : Native-speaker behavior in Australian-Japanese business communication. *International Journal of the Sociology of Language* 92, 87-117.
- Marriott, H. (1991b) : Language planning and language management for tourism shopping situations. *Australian Review of Applied Linguistics*, Series S, No.8, 191-222.
- Marriott, H./Nekvapil, J. (eds) (2012) : Language management approach : Probing the concept of “noting” [Special issue]. *Journal of Asian Pacific Communication* 22 (2).
- Mehan, H. (1991) : The school's work of sorting students. In D. Boden/D.H. Zimmerman (eds), *Talk and Social Structure*. Cambridge : Polity Press, 71-90.
- Muraoka, H. (2000) : Management of intercultural input. *Journal of Asian Pacific Communication* 10, 297-311.
- Nekvapil, J. (2000a) : Language management in a changing society : sociolinguistic remarks from the Czech Republic. In B. Panzer (ed.), *Die sprachliche Situation in der Slavia zehn Jahre nach der Wende*. Frankfurt am Main etc. : Peter Lang, 165-177.
- Nekvapil, J. (2000b) : On the formation of interpretive sociolinguistics. *Sociolinguistica* 14, 33-36.
- Nekvapil, J. (2000c) : Sprachmanagement und ethnische Gemeinschaften. In L. N. Zybatow (ed.), *Sprachwandel in der Slavia*. Frankfurt am Main : Peter Lang, 683-699.
- Nekvapil, J. (2004) : Language biographies and management summaries. In H. Muraoka

- (ed.), *Language Management in Contact Situations* Vol. III. Report on the Research Projects No. 104. Chiba: Chiba University, Gradual School of Social Sciences and Humanities[村岡英裕編『接触場面の言語管理研究』Vol. 3. (社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第104集) 千葉大学大学院社会文化科学研究科], 9-33.
- Nekvapil, J. (2006): From language planning to language management. *Sociolinguistica. International Yearbook of European Sociolinguistics* 20, 92-104.
- Nekvapil, J. (2007): On the relationship between small and large Slavic languages. *International Journal of the Sociology of Language* 183, 41-60.
- Nekvapil, J. (2009): The integrative potential of Language Management Theory. In J. Nekvapil and T. Sherman (eds), *Language Management in Contact Situations. Perspectives from Three Continents*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1-11.
- Nekvapil, J. (2011): The history and theory of language planning. In E. Hinkel (ed.), *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. Volume II. New York and London: Routledge, 871-887.
- Nekvapil, J./Nekula, M. (2006): On language management in multinational companies in the Czech Republic. *Current Issues in Language Planning* 7:307-327 [reprinted in A.J. Liddicoat and R.B. Baldauf (eds), *Language Planning in Local Contexts*. Clevedon, Buffalo, Toronto: Multilingual Matters, 2008, 268-287].
- Nekvapil, J./Sherman, T. (eds) (2009a): *Language Management in Contact Situations: Perspectives from Three Continents*. Frankfurt am Main: Peter Lang. [訳注: 『社会言語科学』第14巻第2号(2012年)45-50ページに本論文監訳者による書評が掲載されている。]
- Nekvapil, J./Sherman, T. (2009b) Pre-interaction management in multinational companies in Central Europe. *Current Issues in Language Planning* 10, 181-198.
- Nelde, P. H. (2003): Prerequisites for a European language policy. In Ahrens, R. (ed.), *Europäische Sprachenpolitik/European Language Policy*. Heidelberg: Universitätsverlag Winter, 415-431.
- Neustupný, J.V. (1978): *Post-structural Approaches to Language*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Neustupný, J.V. (1984): Language planning and human rights. In A. Gonzales, FSC

- (ed.), *Panagani. Essays in Honor of Bonifacio P. Sibayan on his Sixty-Seventh Birthday*. Manila : Linguistic Society of the Philippines, 66-74.
- Neustupný, J.V. (1994) : Problems of English contact discourse and language planning. In T. Kandiah/J. Kwan-Terry (eds), *English and Language Planning*. Singapore : Academic Press, 50-69.
- Neustupný, J.V. (1999) : Následné (follow-up) interview [Follow-up interview]. *Slovo a slovesnost* 60, 13-18.
- Neustupný, J.V. (2002) : Sociolingvistika a jazykový management [Sociolinguistics and language management]. *Sociologický časopis/Czech Sociological Review* 38, 429-442.
- Neustupný, J.V. (2003) : Japanese students in Prague. *International Journal of the Sociology of Language* 162, 125-143.
- Neustupný, J.V. (2004) : 「言語管理理論の歴史的位罫：アップデート」村岡英裕編『接触場面の言語管理研究』Vol. 3. (社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第104集) 千葉大学大学院社会文化科学研究科, 1-7.
- Neustupný, J.V. (2006) : Sociolinguistic aspects of social modernization. In U.Ammon, N.Dittmar, K.J.Mattheier and P.Trudgill (eds), *Sociolinguistics. An International Handbook of the Science of Language and Society*. Vol.3. Berlin/New York : Walter de Gruyter, 2209-2223.
- Neustupný, J.V. (2012) : Theory and practice in language management. *Journal of Asian Pacific Communication* 22 (2), 295-301.
- Neustupný, J.V./Nekvapil, J. (2003) : Language management in the Czech Republic. *Current Issues in Language Planning* 4, 181-366 [reprinted in Baldauf, R.B./Kaplan, R., B. (eds), *Language Planning and Policy in Europe, Vol. 2. : The Czech Republic, The European Union and Northern Ireland*. Clevedon/Buffalo/Toronto : Multilingual Matters, 2006, 16-201]
- Neustupny, R. (1996) : Australians and Japanese at Morwell : Interaction in the work domain. In H. Marriott/M. Low (eds), *Language and Cultural Contact with Japan*. Melbourne : Monash Asia Institute, 156-171.
- Phillipson, R (2003) : *English-Only Europe? Challenging Language Policy*. London/ New York : Routledge.
- Rubin, J./Jernudd, B.H. (eds) (1971) : *Can Language Be Planned?* Honolulu : The

University Press of Hawaii.

- Rubin, J./Jernudd, B.H./Das Gupta, J./Fishman, J.A./Ferguson, C.A. (eds) (1977) : *Language Planning Processes*. The Hague/Paris/New York : Mouton Publishers.
- Sherman, T. (2006) : Uncovering institutionally imposed norms through the interaction interview : Mormon missionaries in the Czech Republic. In H. Muraoka (ed.), *Language Management for the Coming Multicultural Societ.* (= *Language Management in Contact Situations. Vol. 4*). Report on the Research Projects No. 129. Chiba : Chiba University, Graduate School of Social Sciences and Humanities, 1-12.
- Sloboda, M. (2010) : Review : Applied Linguistics : Spolsky (2009). LINGUIST List, 21 (227). Available from <http://linguistlist.org/issues/21/21-227.html>.
- Sloboda, M./Szabó-Gilinger, E./Vigers, D./Šimičić, L. (2010) : Carrying out a language policy change: advocacy coalitions and the management of linguistic landscape. *Current Issues in Language Planning* 11 (2), 95-113.
- Spolsky, B. (2004) : *Language Policy*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Spolsky, B. (2009) : *Language Management*. Cambridge : Cambridge University Press (本書の書評は Sloboda (2010), Dovalil (2011) 参照)。[訳注：本誌第6号 (2010年) 35-39 ページに菊地浩平氏による書評が掲載されている。]
- To, Ch./Jernudd, B.H. (2001) : Terminological problems and language management for internet language professionals in Hong Kong. *Journal of Translation Studies*, No. 6, pp. 95-110 (Department of Translation, The Chinese University of Hong Kong).
- Van Els, T.J.M. (2006) : The European Union, its institutions and languages : Some language political observations. In Baldauf, R.B./Kaplan, R., B. (eds), *Language Planning and Policy in Europe, Vol. 2 : The Czech Republic, The European Union and Northern Ireland*. Clevedon/Buffalo/Toronto : Multilingual Matters, 202-251.

From Language Planning to Language Management: J. V. Neustupný's Heritage

Jiří Nekvapil

This translation into Japanese of a paper originally published in English in “Media and Communication Studies” 63 (2012) :5-21 is to commemorate the 80th birthday of J.V.Neustupný, one of the founders of the Japanese Association for Language Policy, on October 30, 2013. This paper pursues three goals : 1. to demonstrate the terminological shift from “language planning” towards “language management”, 2. to point out that this shift is facilitated by the growing influence of a particular theory of language management initiated mainly by J.V.Neustupný, which is called Language Management Theory, 3. to present the central features of the theory, arguing that it is well suited not only to the analysis of language macro-planning but also to language micro-planning.

(カレル大学、プラハ)